

「紛らわしい語の識別」の第二回。9 「紛らわしい語の識別1」でとりあげたものも、今回とりあげるものも、実際の文章の中に紛れてしまおうとなかなか気づきにくい、という厄介なシロモノ。大切な語を見落とさないように、古文を読むときは慎重に単語を追うように心がけることです。

紛らわしい語の識別②

9 「紛らわしい語の識別1」では(1)「けれ」(7)「と」を取り上げたが、今回は(8)「な」以降についてまとめてみよう。

紛らわしい語の識別一覧②

	文法的説明	識別のポイント
(8) な	①完了の助動詞「ぬ」の未然形 ②終助詞(詠嘆) ③終助詞(禁止) ④副詞(禁止) ⑤断定の助動詞「なり」の連体形「なる」の撥音便「なん」の「ん」が表記されない形	①連用形に接続(後に助動詞「む」、接続助詞「ば」が続くことが多い)。 ②文末にあつて、詠嘆の意味を表す。 ③文末にあつて、終止形(ラ変型は連体形)に接続し、禁止の意味を表す。 ④後に続く終助詞「そ」と呼応し、「なくそ」の形で禁止の意味を表す。 ⑤体言・連体形に接続(「ななり」「なめり」等の形で現れる)。
(9) なむ	①係助詞(強意) ②終助詞(願望) ③完了の助動詞「ぬ」の未然形+推量の助動詞「む」 ④ナ変動詞の未然形活用語尾+推量の助動詞「む」	①係り結びとなり、文末が連体形となる(省略しても文意が通じる)。 ②文末にあつて、未然形に接続し、願望(他への願望)の意味を表す。 ③連用形に接続(「なむ」の形で現れる。「な」は、ほとんどの場合、強意(確述)の用法。へきつと(だろう)の形で現れる)。 ④「往(い)なむ」「死なむ」の形で現れる。
(10) なり	①ラ行四段動詞「なる」の連用形 ②断定の助動詞「なり」の連用形・終止形 ③伝聞・推定の助動詞「なり」の連用形・終止形 ④形容動詞(ナリ活用)の連用形・終止形活用語尾	①文節の頭にあり、述語となる(へくになる)へくとなるの意味を表す。 ②体言・連体形に接続。 ③終止形(ラ変型は連体形)に接続。 ④直前に、語幹となつて状態を示す語がある。

(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)
<p>らむ</p> <p>④ラ行動詞の未然形活用語尾＋推量の助動詞「む」</p> <p>ラ変型の活用をする助動詞</p>	<p>ばや</p> <p>① 現在推量の助動詞「らむ」の終止形・連体形</p> <p>② 完了の助動詞「り」の未然形＋推量の助動詞「む」</p> <p>③ 助動詞「たり」等の未然形の末尾＋推量の助動詞「む」</p> <p>＝</p>	<p>ね</p> <p>① 打消の助動詞「ず」の已然形</p> <p>② 完了の助動詞「ぬ」の命令形</p>	<p>ぬ</p> <p>① 打消の助動詞「ず」の連体形</p> <p>② 完了の助動詞「ぬ」の終止形</p> <p>③ ナ変動詞の終止形活用語尾</p>	<p>にて</p> <p>① 格助詞</p> <p>② 断定の助動詞「なり」の連用形＋接続助詞「て」</p> <p>③ 完了の助動詞「ぬ」の連用形＋接続助詞「て」</p> <p>④ 形容動詞（ナリ活用）の連用形活用語尾＋接続助詞「て」</p>	<p>に</p> <p>① 格助詞</p> <p>② 接続助詞</p> <p>③ 完了の助動詞「ぬ」の連用形</p> <p>④ 断定の助動詞「なり」の連用形</p> <p>⑤ 形容動詞（ナリ活用）の連用形活用語尾</p> <p>⑥ ナ変動詞の連用形活用語尾</p> <p>⑦ 副詞の一部</p>
<p>④ラ行に活用する語が語幹となっている。</p>	<p>① 終止形（ラ変型は連体形）に接続。</p> <p>② サ変の未然形・四段の已然形（命令形）に接続。</p> <p>③ 「らむ」の直前で区切れない。</p>	<p>① 文末にあって、未然形に接続。</p> <p>② *未然形に接続していれば順接の仮定条件＋疑問・反語。 *已然形に接続していれば順接の確定条件（原因・理由）＋疑問・反語。 係助詞「や」の結びとなり、文末は連体形。</p>	<p>① 未然形に接続（係助詞「こそ」の結びになることや、後に接続助詞「ば」「ど」「ども」が続くことが多い）。</p> <p>② 連用形に接続。</p>	<p>① 未然形に接続。</p> <p>② 連用形に接続（「ぬべし」の形で現れる「ぬ」は、ほとんどの場合、強意（確述）の用法。へきつとく（だろう）等の意味を表す）。</p> <p>③ 「往（去）ぬ」「死ぬ」の形で現れる。</p> <p>④ 直前に、語幹となって状態を示す語がある。</p>	<p>① 体言・連体形に接続（連体形に接続する場合は、後に体言を補える）。</p> <p>② 連体形に接続（後に体言を補えない。へのでへへのに等の意味で後に続く）。</p> <p>③ 連用形に接続（後に「き」「けり」「たり」等の助動詞が続くことが多い）。</p> <p>④ 体言・連体形に接続（後に「あり」「候ふ」「侍り」等が続くことが多い）。</p> <p>⑤ 直前に、語幹となって状態を示す語がある。</p> <p>⑥ 「往（去）に」「死に」の形で現れる。</p> <p>⑦ 活用せず、切り離せない。</p>

▶ 例文

- (8) ①そのこと果てなば、とく帰るべし。 (『徒然草』)
 (『その用件が終わったならば、早く帰るのがよい』)
 ②花の色はうつりにけりな (『古今和歌集』)
 (『桜の花の色はすっかりあせてしまったなあ』)
 ③あやまちすな。心して降りよ。 (『徒然草』)
 (『失敗するな。注意して降りよ』)
 ④月な見たまひそ。 (『竹取物語』)
 (『月をご覧なさらないでください』)
 ⑤この皇子の居給ふべきなめり。 (『源氏物語』)
 (『この皇子がお立ちになるはずであるようだ』)
 (9) ①もと光る竹なむ一筋ありける。 (『竹取物語』)
 (『根元の光っている竹が一本あった』)
 ↓訳出する際には反映されない。
 ②梅咲かなむ。 (『更級日記』)
 (『梅が咲いてほしい』)
- (10) ①髪もいみじく長くなりなむ。 (『更級日記』)
 (『髪もきつととても長くなるだろう』)
 ②願はくは花の下にて春死なむ (『山家集』)
 (『なんとかして花の下で春に死にたい』)
 ③治承も五年になりけり。 (『平家物語』)
 (『治承五年になったのであった』)
 ④女もしてみむとてするなり。 (『土佐日記』)
 (『女もしてみようと書く』)のである (『今昔物語集』)
 (『弓の音すなり。』)
 (『弓の音がするようだ』)
 ⑤寺のさまもいとあはれなり。 (『源氏物語』)
 (『寺のありさまもたいそう趣深い』)
- (11) ①昔、男、片田舎に住みけり。 (『伊勢物語』)
 (『昔、ある男が片田舎に住んでいた』)

(18)	(17)
を	る
② 接続助詞 ③ 間投助詞	① 受身・尊敬・自発・可能の助動詞「る」の終止形 ② 完了の助動詞「り」の連体形
② 連体形に接続(「を」の前に体言を補えない)。 ③ 種々の語に付き、省略しても文意が通じる(詠嘆・強意等の意味を表す)。	① 四段・ナ変・ラ変の未然形に接続。 ② サ変の未然形・四段の已然形(命令形)に接続。 ① 体言・連体形に接続(連体形に接続する場合は、前に体言を補える)。 ② 連体形に接続(「を」の前に体言を補えない)。 ③ 種々の語に付き、省略しても文意が通じる(詠嘆・強意等の意味を表す)。

※(10)「なり」↓ラ変型の連体形に接続している場合、接続パターンからは②断定か③伝聞・推定かを特定できないので、文脈から識別する。

(11)「に」↓④断定の助動詞「なり」と⑤形容動詞(ナリ活用)とは同じパターンの活用をするので、ともに連用形に「に」が現れる。

- ② 抜かむとするに、大方抜かれず。
 (「徒然草」)
 (「抜こうとするのに、どうしても抜くことができない」)
- ③ 船こぞりて泣きにけり。
 (「土佐日記」)
 (「船中の人がみなそろって泣いたのであった」)
- ④ おのが身は、この国の人にもあらず。
 (「竹取物語」)
 (「私は、この国(「人間世界」)の住人ではない」)
- ⑤ 翁やうやう豊かになりゆく。
 (「竹取物語」)
 (「竹取じいさんは次第に裕福になっていく」)
- ⑥ 往にし年、京を別れし時、
 (「源氏物語」)
 (「過ぎ去った年、京を離れた時」)
- ⑦ つひに行く道とはかねて聞きしかど、
 (「古今和歌集」)
 (「最後に行く道とは以前から聞いてはいたが」)
- (12) ① 奥なる屋にて酒飲み、物食ひ、
 (「徒然草」)
 (「奥にある部屋で酒を飲み、物を食べ」)
- ② 父は直人にて、母なん藤原なりける
 (「伊勢物語」)
 (「父親は普通の身分の人であって、母は藤原氏の出身であった」)
- ③ 強ひられて、わびにて侍り。
 (「源氏物語」)
 (「強いられて、わびにて侍り」)
- ④ 声は幼げにて文読みたる。
 (「徒然草」)
 (「声は幼い様子で書物を読んでいる」)
- (13) ① 夢にも人に会はぬなりけり
 (「伊勢物語」)
 (「夢の中でもあの人に会わないことだなあ」)
- ② 黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きbぬべし。
 (「土佐日記」)
 (「黒い雲が突然出て来た。風もきつと吹くだろう」)
- ↓ a「ぬ」は完了、b「ぬ」は強意(確述)の用法。
 ③ あはれ今年の秋もいぬめり
 (「千載和歌集」)
 (「今年の秋もむなしく過ぎ去っていくようです」)
- (14) ① 風波やまねば、なほ同じ所に泊れり。
 (「土佐日記」)
 (「風波がやまないの、まだ同じ所に停泊している」)
- ② 夜ふけぬ。帰りたまひぬ。
 (「大和物語」)
 (「夜もふけた。もうお帰りになってしまいなさい」)
- (15) ① 物語といふもののおんなるを、いかで見ばや。
 (「更級日記」)
 (「物語というものがあるといいうのを、なんとかして見たい」)
- ② 心あてに折らばや折らむ
 (「古今和歌集」)
 (「当て推量でも折るならば折ってみようか」)
- (16) ① 夜半には君がひとり越ゆらむ
 (「伊勢物語」)
 (「真夜中にはあなたは一人で(龍田山を)越えているだろう」)
- ② あはれ知れらむ人に見せばや
 (「後撰和歌集」)
 (「越深い味わいを解しているような人に見せたいものだ」)
- ③ 絵よくかきたらむ屏風を、
 (「更級日記」)
 (「上手に絵を描いたような屏風を」)
- ④ 深き故あらむ。
 (「徒然草」)
 (「深いわけがあるのだろう」)
- (17) ① 風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる。
 (「枕草子」)
 (「風が物を吹き動かす音にも、[自然と]はっと驚かれる」)
- ② 道知れる人もなくてまどひ行きけり。
 (「伊勢物語」)
 (「道を知っている人もいなくて迷いながら行った」)
- (18) ① 雀の子を犬君が逃がしつる。
 (「源氏物語」)
 (「雀の子を犬君(「遊び友達の子」)が逃がしてしまったの」)
- ② 明日は物忌みなるを、門強くささせよ。
 (「蜻蛉日記」)
 (「明日は物忌みであるから、門をしっかりと閉めさせよ」)
- ③ まことにそは知らじを。
 (「枕草子」)
 (「本当にそんなことは知らないだろうなあ」)